

# マイスターのささやき「レンタカーで巡る 世界遺産！」

大阪府豊中市 世界遺産マイスター 森瀬 英司

## ◇第5話 (番外編 I)「ラサのポタラ宮歴史地区」(中華人民共和国)

第4話に引き続き、第5話を書かせていただきますが、今回の旅はレンタカーを使っていないので、タイトルを(番外編 I)とさせていただきます。しかも、ひとり旅ではなく、息子と一緒にです。私がレンタカーでの世界旅行を始めたのはもともと息子との旅がスタートで、小さな息子に色々な外国の様子を見せるために、車で巡る自由な旅を思いついたのです。高校から大学卒業までは毎年、約10日間の父子ふたり旅を欠かさず、男同士の濃厚な時間を共有することができました。助手席に座らせ、ナビゲーターをさせたことが良い経験になったのでしょうか。今ではまったく日本を出ることを苦にしない人間へと成長し、見知らぬ土地でも迷わない知恵を持っています。さらには、自動車ビジネスの第一線で海外成功したいと某T社に入社し、結婚後は夫婦そろって自由な旅を毎年楽しんでいるようです。

さて、前置きが長くなりましたが、今回は、2014年8月当時、北京に駐在していた息子との現地合流から始まります。

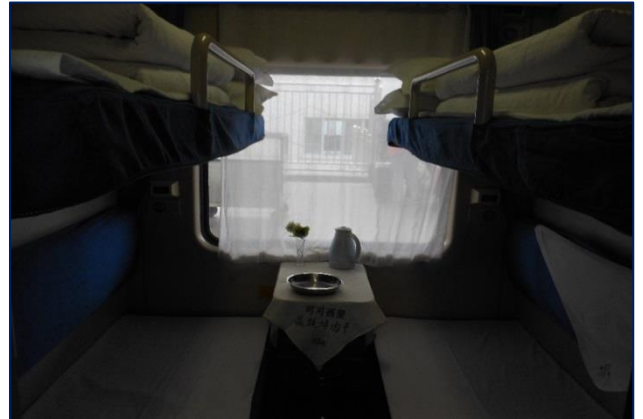
今回の旅の目的のひとつは、青蔵鉄道(チンツァン・ティエルーあるいは青海チベット鉄道)で、チベット自治区ラサまで行くことにありました。私は小学生の頃から鉄道ファンで、今で言うところの“乗り鉄”です。学生時代は、ヨーロッパの特急列車(当時はTEE、Trans Europ Expressと呼んでいました)をユーレイル・パスで乗りまわしていました。今でも、世界の珍しい鉄道や有名列車、はたまた名もない列車でも、とにかく列車を見かけると乗りたくなってしまいます。数年前に南米ペルーのクスコから乗車したアンデアン・エクスプローラーは、世界第2位の高所を通過しながら、チチカカ湖へと向かう列車でした。それでは、世界第1位の高所を通る列車は……? ということで、青蔵鉄道へのトライを決めたのです。

日本人が中国に入国する場合、短期間ならばビザなしで観光することができますが、チベット自治区に入るには「入域許可書」が別途必要です。個人で勝手に行くことはできません。必ず旅行代理店が主催するツアーに形式上、参加しなければなりません。個人旅行で青蔵鉄道に乗車するということはたいへんな制限がかかり、代理店に宿泊先と青蔵鉄道のチケットを手配してもらい、チベット内は必ずガイドが手配する車でガイドと一緒に行動することのみにより可能とのこと。外国人旅行者が入手困難な、このチケットが取れたと分かったのは、日本出発の1週間前。それまでまったく旅程が確定しないまま不安な日々を過ごしていたので、吉報とはまさにこのことでした。

出発日はちょうどお盆休みに入る頃。成田から北京経由で青海省西寧に到着。その翌日、青蔵鉄道に乗車するまで少し時間があつたので、西寧の街を散策することにしました。西寧の人々は中国系の顔をしていますが、ムスリム系と同じ格好の人たちが大勢いて、まるで中東の街に迷い込んだような雰囲気になりました。仕事も

含め、これまで何度も中国には足を運んでいましたが、中国でもこのような宗教色の濃い街があることに驚きました。と同時に、これから向かうチベット自治区と同様に、ここでの民族問題を思い出しました。

西寧からラサまで、青蔵鉄道では総距離 1,956km、所要時間は約 24 時間です。青蔵鉄道に限らず、すべての列車がここ西寧を経由し、ラサを目指します。ハイ・シーズンなので、駅の電光掲示板は、本日 8 本のラサ行きがあることを表示しています。ちなみに、台湾人を含み、我々日本人や外国人はすべて、軟臥車 (A 寝台) しか利用できず、写真のような二段ベッドが設置された 4 人用コンパートメントで過ごすことになります。



青蔵鉄道の最大の特徴は、鉄道では世界最高地点の海拔 5,072m にあるタンラ峠を通過することにあります。この区間はツンドラ地帯のため、建設工事は冬季の寒さと気圧の低さ、酸素不足で困難を極めたようです。また、世界有数の自然保護地域を走るため、生息動物や植物の生態系を維持することに配慮した、中国で初めての対策を講じていると聞いています。対して、我々乗客は高山病への対策が必須になります。青蔵鉄道の車両内は、飛行機 (製造は海外メーカーが協力) 同様に与圧され、酸素供給設備も整っていますし、万が一に備えて医師と看護師も常駐しているようです。とはいえ、ラサ市内も海拔 3,500m 以上の地にあり、南米クスコでの経験から、我々は日本で高山病の薬を処方してもらい、乗車前に服用しておきました。

車外の景色は、緑一面の草原に、時々青い水をたたえた湖が現れます。チベット特有のヤギや羊、カモシカなどの動物たちも遠望できます。しかし、同じような景色が長く続くと、それも単調なものに。チベット仏教の象徴であるゴンパ (寺院) も沿線にちらほらと見えますが、解放軍と思われる軍人らが線路の傍に等間隔で起立しており、中国内情への緊張を覚えます。また、事前に海拔 5,072m 地点を真夜中に通過することは分かっていたものの、深夜で寝入ってしまい、まったく確認できなかったことは、鉄道ファンとしてはやはり残念でした。コンパートメントで同室したシンガポール人とマレーシア人は日本が大好きで、彼らから日本についての質問攻めに遭いました。彼らの方が最新的话题をよく知っていることに驚きでした。朝食を終え、ベッドの上で寝たり起きたりして退屈さを凌いでいるうちに、ラサの街が遠くに眺められるようになり、しばらくして列車は、“だだっぴろい”ラサ駅に到着しました。

海拔 3,650m にあるラサは、空気の澄んだ深い青色の空と、強く照りつく日射しが、最初の印象でした。ラサ駅を降り立つと、外国人は別棟に誘導され、中国国内を移動してきたにもかかわらず、パスポートと入域許可書を厳重にチェックされます。無事に終え駅舎を出ると、我々専属の女性ガイドと男性運転手が待ち構えていました。ラサを離れるまで、彼らに付きまといられるわけです。まあ、日本語を話してくれるので楽ではありますが、ガイド付きで時間が制約された旅に、我々は慣れていないので、逆に気疲れが心配でした。ホテルにチェックインした後、チベット族の居住エリアである旧市街に向かいました。ここは、ガイドなしで自由に

歩くことが許されています。しかし、狭い道の何力所かに、手荷物検査の機械が置かれており、警官が常にチェックしています。以前起こった暴動の影響でしょうか、厳しい顔つきで街中をパトロールしていました。

高地順応も兼ねて、さっそく旧市街のジョカン寺（トゥルナン寺／大昭寺）周辺を散策することにしました。高山病予防薬を飲んでいても、少し歩くと足取りが重く、息苦しくなります。ジョカン寺は7世紀に創建された吐蕃時代の寺院で、チベット仏教の総本山です。2000年に、世界遺産『ラサのポタラ宮歴史地区群』の構成資産として、追加登録されました。ジョカン寺前の広場では五体投地を繰り返す巡礼者が多数おり、石畳は行き交う人々の摩耗でつるつるになっています。寺院内は線香の煙でもうもうとしています。阿弥陀仏を祀る無量光堂、薬師堂、観音堂、弥勒堂など、日本でも耳にする名前が次々と出てきて、身近なものに感じ、仏教がチベットを通して伝来したのだと、強く印象づけられました。ジョカン寺の屋上に出ると、明日訪れるポタラ宮の威容が遠望でき、期待感が膨らみます。

昼食や夕食などの外での食事はもちろん、勝手に好きなレストランに入ることは許されません。一応好みは聞かれますが、ガイド指定のお店に入ります。メニューも外国人用のものを決められています。幸いにも飲酒は自由なので、定石通り、地元のビールを注文しましたが、生ぬるく、高地ゆえかアルコール度数が極端に低く、まったく飲めた代物ではありませんでした。



翌日よいよ、ラサの象徴である世界遺産ポタラ宮に入ります。言わずと知れた、ダライ・ラマの宮殿です。高さ約117m、広さ約41km<sup>2</sup>にもおよぶ広大さを誇ります。ポタラ宮の本格的な建設は、ダライ・ラマ五世の時とされ、1695年に完成しました。これ以降、ダライ・ラマ14世がインドに亡命する1959年までの約300年にわたり、チベット聖俗両界の中心地となりました。ポタラ宮への入場および観覧時間は、個人別にきっちり時間が決められており、当日の朝、ホテルに迎えに来た

ガイドにすべて従わねばなりません。宮殿内を自由に観てまわることもできません。観光資源としても絶大な世界遺産だと思いますが、外国人にチベット仏教やチベット文化をあまり知ってほしくないという、中国当局の本意がうっすらと見えてきます。

宮殿内部は、白宮と呼ばれる歴代ダライ・ラマの居住と執政所をもつ領域と紅宮と呼ばれる歴代ダライ・ラマの霊塔や大集会場などの宗教的な領域とがあり、白宮と紅宮の間を迷路のように複雑に入り組んだ路が通っています。部屋は全部で1000室もあるらしいのですが、我々が観ることを許されているのは、ごく一部です。内部では、結構狭い階段の昇り降りを何度も繰り返し、高地のせいもあって、息が切れてしまいました。また、金や宝石がふんだんに施された仏像に、日本のものとはまた趣の異なった仏教美を発見し、仏教文化の多様性を感じます。カラフルな絵画ひとつひとつに、人々の幸福と平和の祈りが込められているという、ガイドの話にも聴き入ってしまいました。外観は異なっても、文化のルーツは同じ仏教であり、同じ名前を持つ仏像に親近感を



覚えながら、日本に帰ったらもう一度、京都と奈良を訪れて、シンプルな仏像をゆっくりと鑑賞して、その良さを再発見しようと心に誓いました。海外で日本の素晴らしさを再認識することは常ですが、日本の文化を掘り下げて勉強してみたいと思ったのは、これが初めてでした。



ポタラ宮の後は、こちらも世界遺産にも登録されている、「ノル布林カ」に案内されました。ノル布林カはラサの中心街に位置しますが、広大な公園の敷地内にあるので、騒々しさからほど遠い静寂そのものです。ノル布林カはダライ・ラマ7世が1740年代に造営し、歴代ダライ・ラマに夏離宮として利用されてきました。特にダライ・ラマ14世が実際に生活していたタクテン・ミギユ・ポタン（写真）は、緑と花に囲まれた、実に美しい離宮でした。



その夜はチベットオペラ鑑賞、そして、翌日は郊外のゴンパ巡りと、標高4,441mに位置する氷河湖のヤムドク湖（ナムツォ）にも行ってきました。チベットの大自然は、華やかさはありませんが、素朴な温かさでいっぱいです。ガイド必須で個人行動はままならず、厳重な警察の度重なる検問には閉口しますが、道中にチベット民族のローカルな生活も垣間見ることができました。至る所にチベット仏教のゴンパがあり、彼らのその信心深さや日本人には珍しい宗教観に感心しきりでした。ラサでの旅程をすべて終えた我々は、通常のツアーでは北京や上海経由で帰国の途に着きますが、ここからが個人の旅ならでは。明日は飛行機でヒマラヤ山脈を越えてネパールのカトマンズへと向かいます。機内の窓から眺めるヒマラヤ山脈の雄姿に胸を膨らませながら、早めに床に就きました。

(第6話に続く)  
以上